

# 『バーナビー・ラッジ』における変化と不変

—歴史小説家としてのディケンズ—

Change and Changelessness in *Barnaby Rudge*:

Dickens as a Historical Novelist

矢次 綾

Aya YATSUGI

## I 序

『バーナビー・ラッジ』(以下, *BR*) について従来の指摘で多いのは, ディケンズがチャーティスト運動とゴードン暴動を同一視し, 過去を借用して1830年代の社会についての憂いを描いたということである。この指摘は, ステイブン・マーカスの『ディケンズ—ピクウィックからドンビーまで』の *BR* に関する項や (Marcus 172), エドモンド・ウィルソンの「ディケンズ—二人のスクルージ」に見られる (Edmund Wilson 18)。しかし, スペンスが1973年にこの見方に疑念を表して以来, 従来の解釈に変化が生じている。スペンスは疑念の根拠として, ディケンズがチャーティスト運動とゴードン暴動を同一視していたと考えるべき証拠を *BR* 以外にほとんど見出せないこと, そしてディケンズがチャーティスト運動をどの程度理解して *BR* の中でゴードン暴動として描いているか, 判定し難いことを挙げている (Spence 19–20)。例えばグレイヴィンもそのうちの一人だが, 最近では, チャーティスト運動とゴードン暴動を関連づけられない批評が一般的であるように思われる。

*BR* でディケンズは1830年代を描いたのではなく, 当初から歴史を描こうとしていたと考えられる根拠として, 1841年の *BR* 序文における以下の箇所が挙げられる。

No account of the Gordon Riots, having been to my knowledge introduced into any Work of Fiction, and the subject presenting very extraordinary and remarkable features, I was led to project this Tale. (3)<sup>1</sup>

もっとも、ゴードン暴動がフィクションに未だかつて取り上げられていないということについて、ディケンズに勘違いがあったし (Butt and Tillotson 77-78), そもそもディケンズがこの時期に歴史小説を描くのは、出版社との関係においても、ヴィクトリア朝の英国を描いて人気作家になったその時点までの経歴においても、時期尚早であった (Bowen, "Introduction" xiii-iv). 要するに、種々の点において、ディケンズは歴史小説を描くのもっと熟慮する必要があったのだ。

しかし、ディケンズがこの時期に歴史小説に目を向けたのは、当然の成り行きのように筆者には思える。一つには、ウォルター・スコットの歴史小説が国の内外で読まれ、文学史の流れに影響をあたえていた。イギリスだけを見ても主要な作家のほとんどがこの影響を受け、歴史小説という小説の新たなジャンルに挑戦している (Bowen, "The Historical Novel" 244-45). ディケンズもこの流れの中で、小説家としての力量を自ら問うてみたとして何ら不思議ではない。二つ目として、一応の成功を収めていたからこそ、ディケンズは作家として次の段階を踏むために新たな挑戦を必要とした。新たな挑戦とは、その後の彼の作家としての経歴から考慮するなら、社会をパノラマとして描くことである。ディケンズは *BR* 以前の作品でもイギリスの社会を描いているが、*BR* で初めて貴族から馬丁、死刑執行吏に至るまで、社会的に多岐に渡る人物を登場させた。そして、『リトル・ドリット』や『互いの友』などに続くパノラマ的な社会像を創り上げたのである。<sup>2</sup>

ディケンズが新しい社会像を描くための糸口をゴードン暴動という過去の歴史に求めた理由は、歴史小説の普及についてのルカーチの考察から類推することができる。ルカーチによれば、19世紀になって人々が歴史に関心を抱き、歴史小説を読むようになった背景として、フランス革命とナポレオン戦争という歴史的な出来事が、ヨーロッパ規模で史上初の「大衆的な経験」(*mass experience*) となったことが大きい。その結果、大衆に歴史というものの存在を知らしめ、さらに、歴史が「絶え間ない変化の過程」(*an uninterrupted process of changes*) であり、「個々人の生活に直接的な影響をあたえる」ことを実感させた (Lukács 23). ディケンズがこれらの歴史的イベントの一般大衆に及ぼした影響を鋭敏に感じ取ったであろうことは想像に難くない。そして、歴史的なイベントが「大衆的な経験」となり、社会のあらゆる階層に属する人々に影響をあたえる様を、彼が熟知するロンドンの史上稀に見る大事件、ゴードン暴動を通して描き出そうとしたのである。<sup>3</sup>

ディケンズがゴードン暴動を選んだ理由として、ゴードン暴動前の数年間と1830年代の間に、類似した危機的状況を見出したことは否定できない。1832年の第一次選挙法改正によっても労働者に選挙権があたえられなかったため、オーエン (Robert Owen) らを中心にした労働者団体が1837年に人民憲章 (People's Charter) を作成し、1839年と42年に議会に提出した。ディケンズは労働者すな

わちチャーティストの要求の多くに賛同したが (Bowen xxii), 彼はまさにこの時期に *BR* を構想し小説として練り上げている。

ただし、だからディケンズは過去を借用して現代を描いたのだと解釈するのではなく、彼が歴史に循環する可能性を見出し、ゴードン暴動の惨状が繰り返されるのではないかという危機感を抱いていたと考えるべきであろう。このようなディケンズの歴史観は、マコーリー (Thomas Babington Macaulay) の歴史観に相對する。ディケンズの歴史観が循環的であるのに対し、マコーリーの歴史観は、名誉革命で国王と議会の争いに終止符が打たれて以後、立憲君主制は進化の一步をたどったと主張する直線的なものである (Macaulay 1)。

ディケンズは『オリヴァー・トゥイスト』(以下、*OT*) で、1830年代の危機的状況を招いた政府への批判を展開しているが、ゴードン暴動の惨状を招いたことについても *BR* でその責任を追及している。その一環として、暴徒を「大部分は不当な刑法と、不正な監獄規則と、最悪の警察によって生み出された、ロンドンの屑とも滓とも (scum and refuse) 言うべき連中」と呼び (407), そのうちの一人として死刑執行吏のネッド・デニス<sup>カズ</sup>を挙げている。デニスが自分自身を「法の番人」(a constitutional officer) と呼ぶ通り、彼の職業は法律に基づく。<sup>4</sup> ディケンズはそんな彼を執拗に絞首執行吏と呼ぶことによって、その歪んだ精神もまた法律によって形成されていることを、そして、彼を暴徒の先頭に立たせることによって、事実上法律が暴動を導いていることを示唆している。

支配層の暴動への責任を追求する一方で、ディケンズは被支配層の過激な動きに警戒心を抱いた。*BR* において徒弟が親方にいわれのない悪意を抱き、機が熟すれば蜂起することを目論んで結成した「徒弟騎士団」(Prentice Knights) は、ディケンズが急進的すぎるチャーティストを戯画化し、批判的に描いたものと考えられる。彼が1841年の序文で「日々過ごす中でごく常識的な善悪の原理さえ無視する」不逞の輩と呼んでいるのはこの種の暴徒であって (3), 同様の輩が同様の暴挙を引き起こす可能性を1830年代に見出していたのである。

## II 父親たちが作り出す遅延、停滞、不変

歴史小説としては異例なことに、ディケンズは第33章までの小説前半において歴史的な出来事に全く言及していない。遅延、停滞そして不変の重苦しい雰囲気<sup>カズ</sup>に満ちたこの部分でディケンズが展開するのは主に、専制的な父親とそれに反発する息子たちの個人的な物語である。しかし、これを歴史小説としての *BR* の欠陥と見なすべきではない。人物たちは、ゴードン暴動という「大衆的な経験」をするまで、歴史が「絶え間ない変化の過程」であり「個々人の生活に直接的な影響をあたえる」ことを知らないからである。換言すれば、人物たちの意識の中に歴史的な出来事の入る余地が、小説前半にはまだ誕生していない。

従ってディケンズは、あえて歴史的な出来事への言及を避けたのであろう。

「絶え間ない変化」を知らないために、不変の中で生活しているかのような思いに囚われているのが、メイポール亭のジョン・ウィレットである。1775年3月19日に関する第1章においても、1780年の同日に関する第33章においても、彼は居心地の良い酒場で仲間と酒を酌み交わしながらルーバン・ヘアデル殺害事件について噂話をしており、この5年間ほぼ不変の生活を送ったことが示唆される。不変に囚われているからこそ、ゴードン暴動の衝撃は大きい。前ぶれなく暴徒に襲撃されて、彼は精神的に退行し痴呆に陥る。

専制的な父親でもあるウィレット氏が不変に囚われている様は、息子ジョーへの対応に表れる。彼は息子の成長という変化を認めず子供扱いしてジョーに不満を抱かせ、ジョーは家出してしまう。愚鈍なウィレット氏は息子を捜索する張り紙広告においても息子を「<sup>ヤング・ボーイ</sup>少年」と形容し、その身長を実際よりもかなり低く記載して子供扱いを続ける(274-75)。このように、変化を変化として受け容れられず、息子の家出という変化に対応できないため、小説後半になると、ジョーの代わりに暴徒たちが不満を晴らしてウィレット氏に変化を見せつけるべく、メイポール亭を襲撃する。

宿屋の向かいに立つ柱すなわちメイポールは、宿屋の看板でありウィレット氏の専制性の象徴でもある。ゆえに、暴徒たちは、男根の象徴にも見えるこの柱を切り倒し、フィズ(Hablot K. Browne)による挿絵によれば、あまりの惨状に神経を麻痺させたウィレット氏の頭上をかすめるべく、柱の先端を窓から酒場の中へと突き刺している(454-56)。メイポール亭襲撃は、ウィレット氏の意識に歴史が流入した瞬間であり、専制的な彼が暴徒によって事実上去勢され骨抜きにされた瞬間である。



Old John at a Disadvantage

成長という変化を見逃して息子に不満を抱かせるという点において、理想的な人物ゲイブリエル・ヴァーデンでさえ全く非がないわけではない。ヴァーデン氏は、彼の娘ドリーに対するジョーの恋心を解さず、ドリーではなくヴァーデン夫人に花束を渡すよう

助言してジョーを落胆させる (117). もっとも、徒弟サイモン・タパーティットにいわれない悪意を抱かせたことはヴァーデン氏の責任ではない。タパーティットの「徒弟騎士団」はディケンズが暴力的な労働者を戯画化したものであるし、原英一によればタパーティットは「勤勉な徒弟」ジョーに相対する「怠惰な徒弟」であって (原 472-73), 当初から批判的に描かれているからである。

その変化を見逃してもジョーに慕われるヴァーデン氏を、ディケンズは「時の翁」(Father Time) と上手に付き合い健康的に年を重ねる、すなわち時の変化を受け容れる好人物として描く (25). その一方で、ウイレット氏と同様に否定的な面が目立つ父親たちを、時間の経過に伴う変化を極端に恐れる人物、または変化を正常に遂げられない人物として描いている。利己的な理由から息子エドワードの恋路を邪魔するジョン・チェスターは、変化を恐れる人物である。年齢という変化を感じさせるという理由で父と呼ばれるのを拒否し (267), 化粧を用いて容貌を変化させまいとする。彼の宿敵ジェフリー・ヘアデイルは信頼に足る人物ながら、姪のエマの結婚については専制ぶりを発揮する。ヘアデイル氏は 28 年前のルーバン殺害事件を解決したいという思いが強すぎる、過去に囚われた人物でもある。彼が正常な変化を遂げていないことは、その容貌が 28 年間不変であることに驚愕して、ルーバン殺害の真犯人ラッジ氏が発する言葉により明らかである (513). この間逃走し続けているラッジ氏も過去に囚われているが、彼は不変の痕跡を息子バーナビーに対して、手首の血痕と精神遅滞という形で刻み込んでいる。そして、間接的ながら息子が精神的に成長するのを妨げ、息子や姪を圧迫するチェスター氏やヘアデイル氏と共に、小説前半における不変の雰囲気的一端を形成している。

父親たちだけを見ても、ディケンズは各々の人物の時間との関わり方を異なるものとして描いている。ここで気づかれるのは、マコーリーの歴史観が直線的であるために、進化という特定の見方に反する歴史の可能性を排除しているのではないかということである。すなわちミシェル・フーコーの人間主義 (*humanisme*) を思わせる、単線的な歴史観でもあると言えるのではないか。その一方で、ディケンズは、歴史のすべての可能性を描き出そうとしていないにしても、個々人で時間との関わりが異なることを示唆しながら、マコーリーとは異なる複線的な歴史観を表現していると筆者には思えてならない。

### III 息子たちと暴動

不変の雰囲気形成しているものとして、父親たちの社会的立場も挙げることができる。犯罪者のラッジ氏を除いて父親たちは、都市ブルジョア (ヴァーデン氏)、宿屋の主 (ウイレット氏)、貴族 (チェスター氏)、地主 (ヘアデイル氏) という安定した立場にあり、「確立され安定した世界が当然備えている停滞、不

活性」が不変と結び付く(原 471)。馬丁のヒューはそんな「確立され安定した世界」に反発して然るべき人物であり、実際に暴動の先頭に立つ。ヒューの母親は貧困ゆえに偽金作りに手を染め絞首刑に処せられており、そんな母親に対して、また、6歳だった彼自身に対して何の同情も示さなかった社会に、彼は漠然とした恨みを抱いている(200)。

加えて、ヒューはケンタウロスと呼ばれ、ジプシーの血を引く野性的かつ非理性的な活力の象徴である。食欲についてもドリーに対する色情についても、その表現は率直である(176-79)。すなわち、バフチーンのカーニヴァル的な暴動における異教的儀式の乱飲乱舞のエネルギーを表現するのに然るべき人物と言え。このエネルギーは暴力の源の一つであるが、ディケンズは暴徒の行き過ぎた振る舞いを警戒すると同時に、この常軌を逸した行為に憑かれた群集を描き出すことに魅了されていた(ロッジ 186)。

ヒューには言わば暴徒となる資格があるわけだが、彼の暴動との関わりは実際には皮肉なものであった。それは、デニスの上の身に暴動後に起きる投獄及び絞首刑による死という変化の過程で明らかになる。デニスは、牢獄の房の中でヒューが母親について漏らした言葉より(620-21)、ヒューの父親がチェスター氏であることに感づく。そして、死刑の前日にそれをヴァーデン氏に告白して(628-30)、ヒューが父の意に従って暴徒に組したことを暴露するのである。

ディケンズは、子供の信頼を裏切る大人を例えば『骨董屋』(以下、OCS)で非難しているが(OCS 48)、ヒューの精神的な幼稚さに付け入り、そして利用したチェスター氏は責められるべき大人と言え。チェスター氏が世知によってヒューを圧倒し反発不可能な心理状態へ追い込む過程は(192-200)、OTの中でフェイギンが孤児にスリの手管を教える過程を思わせる(OT 110-11)、ヒューも孤児も教育の欠如や精神的な未成熟のために自分の置かれた状況を把握することができず、結果的に大人に搾取されてしまうからである。要するに、ヒューは社会的弱者としての子供の一人であって、1780年前後においても1830年代においても、子供たちにとって辛い歴史が繰り返されていることを、ディケンズは示唆している。

バーナビーも父親に従順な息子である。バーナビーは父から直接的に暴動への参加を促されたわけではないが、父から受け継いだ性向に従って暴力行為に組している。彼が父の性向を受け継いでいることは、以下の引用に表れている。彼は追剥が父だと知らずに、また父が背後から見ていることも知らずに、追剥を捕まえてやると意気込んでその姿を真似ている。

[Barnaby] twisted his handkerchief round his head, pulled his hat upon his brow, wrapped his coat about him, and stood up before her: so like the original he

counterfeited, that the dark figure peering out behind him might have passed for his own shadow. (150)

グリッパはバーナビーが真似を始める前からラッジ氏の存在に気づいている。そして、フィズの挿絵に描かれている通りラッジ氏を見つめながら (149), 父から息子に伝わる性向が邪悪であることを示唆している。「オレハ悪魔ダゾ」が口癖のグリッパを、原は「物語の背後にある底知れぬ悪の力の代弁者」と呼んでいるが (原 473), ラッジ氏がルーバンを殺害した動機は不明であるし、ゴードン暴動にしても社会的根拠がはっきりしない。<sup>5</sup>どちらも「底知れぬ悪の力」に突き動かされて起きたとしか、説明のしようがない。バーナビーの暴動への関与も、騙されて暴動で金を稼げると信じたというだけでは根拠として不十分であろう。彼は物語の根底を流れる悪の力を父から伝えられ、それに従ったのである。

フライシュマンはゴードン暴動について、社会組織の変革を目指す革命ではなく、ポグロムなのだと言及する (Fleishman 105)。<sup>6</sup>その根拠として、襲撃の対象がカトリック教徒の中でも裕福な人物に限られていること、ロンドン市長を始めとした社会的権威がカトリック教徒を保護の対象から除外していることを挙げている。二つ目の指摘から思い当たるのは、ロンドン市長がカトリックの酒問屋に保護を求められて発する以下の言葉である。

“What a pity it is you’re a catholic! Why couldn’t you be a protestant, and then you wouldn’t have got yourself into such a mess? I’m sure I don’t know what’s to be done.—There are great people at the bottom of these riots.—Oh dear me, what a thing it is to be a public character! [...]” (508, 下線は筆者)



*Barnaby Greets His Mother*

暴動の根底にいる「グレイト・ヒーブル大物」は、国会議員のチェスター氏を始めプロテスタント系の要人を直接的に指すと言える。しかし、フライシュマンによるポグロムという見方を含めて暴動の原因を「底知れぬ悪の力」に求めた場合、「大物」は人々を「底知れぬ悪の力」

に向かわせる者を指すと言えるだろう。そう考えれば、「大物」はヒューを促したチェスター氏はもちろん、バーナビーに邪悪な性向を授けたラッジ氏も指すことになる。

父に従順なヒューとバーナビーが暴動を起こした一方で、父に反発したジョーとエドワードが暴動を鎮圧するのは皮肉に感じられる。兵隊となったジョーはアメリカ独立戦争で片腕を失って帰国し、エドワードは西インド諸島で一財産築いて帰国した際に暴動に遭う。BRにおける暴動にはバフチーンのカーニヴァル的な要素が見られるが、ジョーとエドワードは暴動の只中で再登場するとき、祝祭としてのカーニヴァルで民衆がするように仮装し、ニューゲート牢獄正門でヴァーデン氏を(531)、地下のトンネル内でヘアデイル氏と酒問屋を救う(564)。そこで仮装を脱いで正体を現すと、ジョーはヘアデイル氏に、「時代は変わったのですよ。味方と敵を混乱させずに、はっきり区別して知るべき時が来たのですよ」と言って、混沌とした秩序の中で個人間の新しい関係が築かれつつあることを宣言する。

ジョーは地下という相応しい場所でこの宣言をしている。バフチーンのカーニヴァルで、社会的また文化的な秩序が一時的に破棄されるに伴い、文化の上層は「格下げ」になり下位文化は上昇する。「《上》と《下》はこの際、絶対的な、<sup>トポグラフィ</sup>厳密に地形学的意味」を持っており、下とは大地であって「大地そのものは吸い込んでしまう原理（墓、胎内）であり、生み出し、再生させる原理（母の懐）」である。ゆえに「格下げ」は「埋葬し播種し同時に殺すこと」を意味するだけでなく「より多くのもの、より良いものを生むため」（バフチーン 25-26）なのだ。ジョーやヘアデイル氏が地下にいるのは、「溶解されて新しく生まれるため」に「肉体的下層」すなわち地下へ投げ込まれたためである（バフチーン 51）。

#### IV 暴動後の変化

暴動によってメイポール亭にもたらされた変化は、世代交代である。ジョーが宿屋の主となり、ドリーを妻に迎え子供をもうける。ただし、語り手が彼の子供を「小さなジョーやドリー」（small Joes and small Dollys）と呼びながら暗示しているように（685）、ジョーには、ウィレット氏と同様の父親となり歴史を繰り返す可能性がある。これは個人的なレベルながら、ディケンズの循環的な歴史観の表れと言えよう。

ヘアデイル氏はルーバン殺害事件を決着させ、エマとエドワードの結婚を承認した後、急激に老け込む（672-73）。その理由として語り手は姪と別れる寂しさや孤独感を挙げているが、ヘアデイル氏が過去に囚われた28年間に経なかった

時間的な変化を、短時間で経たためと考えることも可能であろう。彼は、暴動という変化を生き延びた唯一の専制的な父親である。ウィレット氏が衝撃のあまり痴呆に陥ったのは対照的に、ヘアデイル氏はウォレン屋敷を訪れて変化の跡を見極め(675)、懺悔の日々とは言え外国の修道院で新たな生活を送ることになる(680-82)。

「新しく生まれ変わる」ことができなかつたウィレット氏は、バフチーンの「グロテスク・リアリズムの退化・崩壊の過程」を経ている。この過程で「豊穡の悪魔像のファロス<sup>アイモニオン</sup>は切り取られ、その腹はぺしゃんこ」にされ生殖器官を失った結果、新しいものを生み出すことができなくなる(バフチーン 51)。ウィレット氏の場合は生命を育むという概念を理解することができなくなり、孫を見ても「何か恐るべき奇蹟がジョーの身の上を起こった」としか思えない(687)。同様にタパーティットも、暴動で両脚を失うことによって比喩的に去勢される。そして暴動後に妻を迎えるものの、亭主の権威を主張しようとすれば、妻から義足を取り上げられ他人の嘲笑の的になる(684)。去勢されたタパーティットは父権的な勢力を持ち得ないのである。

暴動という変化を生き延びたのか、そうでないのか、判断し難いのがバーナビーである。彼は恩赦を受けるものの、一時的に身を寄せたヴァーデン宅で「生きた人間に囲まれた幽霊のような」気持ちになっている(662)。そして小説の結末で、母親と農場で生活する様が描かれているが(687)、彼は「新しく生まれ変わった」ように見えない。それについてグレイヴィンは、ディケンズが、社会改革者の小説家としてバーナビーの恩赦を描くわけにはいかなかったのに、感情的または道義的な必然性からバーナビーを死刑にできなかったためと指摘している(Glavin 101)。

ディケンズは1780年以前の数年と1830年代に同様の危機的状況を見出し、社会的権威の責任を追及した。従って、危機を繰り返そうとしている社会的権威を小説中で肯定的に描くわけにはいかないのである。1841年の序文でディケンズは歴史の教訓が理解されていないと嘆いているが(3)、これは、社会的権威が暴動についてよく検討せず、適切な処置を約60年間怠り続けていることを非難する言葉と解釈することもできるのではあるまいか。

社会的権威が適切な処置を実際に怠っていたかどうかは、ディケンズにとって問題ではない。彼らが暴動後にどんな改革を行ったとしても、1830年代に再び危機を招いている以上、改革は行われていないも同然である。ピーター・ゲイは、『荒涼館』に関する論考の中で、ディケンズが事実と反する記述をしたとしても、公の問題を取り上げて「自分自身の問題として捉え」なおし、社会批判を展開して「できるだけ多くの支持者を怒らせた」段階でその役割を果たしていると指摘している(ゲイ 61-64)。社会改革者の立場を貫くのなら、ディケ

ンズはバーナビーを絞首刑に処して読者を怒らせ、白痴を罰して暴動鎮圧を印象づけようとする権威を批判すべきだった。しかし、道義的には彼を恩赦にすべきだというディレンマが、変化を生き延びたはずなのに死んでいるようなバーナビーの姿や、恩赦があたえられた経緯の詳細の不明瞭さに表れている。

## V 結び

以上、変化と不変をキー・ワードに *BR* を論じてきた。ディケンズの社会改革者的なものの見方と、循環的な歴史観との関わりにも着目したが、その歴史観に関連して最後に付け加えるとすれば、ディケンズが復古主義への批判を *BR* で執拗に繰り返していることである。

タパーティットが去勢という罰を受けるのも、その復古主義のゆえである。彼は仲間の徒弟に、徒弟が思い通りに休暇を取れないという「墮落と圧制が加えられたのは、疑いもなく、時代の進歩的精神」による、ゆえに「徒弟騎士団」は団結して「古きよきイギリスの慣習を復活させる変化以外的一切の変化に抵抗せねばならぬ」と主張している (76)。ディケンズが「不幸なる元凶」(the unhappy author of all) と呼んで同情を表しながらも (614)、破壊行為の責任ありと見なしたゴードン卿も復古主義的であって、彼の理想はエリザベス一世の治世である。ゴードン卿自身ではなく秘書のガッシュフォードの言葉ながら、カトリック教徒の権利が拡大されつつある 1770 年代後半は、彼にとって「処女王エリザベス陛下が墓の中で涙を流され、血を好むメアリーが陰険な眉をひそめつつ我が目の顔にのし歩く」危機と形容されている (290)。

そして、デニスは、カトリック教徒の権利拡大を嘆くと同時に、些細な罪で人を絞首刑に処す 1780 年前後の法律を称えて、暴動の前に次の台詞を吐いていた。

“And in times to come [...] if our grandsons should think of their grandfathers’ times, and find these things altered, they’ll say ‘Those were days indeed, and we’ve been going down hill ever since.’ [...]” (312)

デニスから見た孫の代とは 1830 年代に他ならない。デニスのような死刑執行吏が法の手先となって貧しい母親を絞首刑に処し、ヒューのような社会的弱者を生み出した過去を、後世に懐かしまなければならないとすれば、それこそが最も憂えるべき事態であろう。歴史は繰り返して、同様の危機がもたらされるかもしれないが、現状を避けるために過去へ遡ることを望むべきではない。要するに、ディケンズは歴史に循環性を見出しても、絶対に後退させるべきではないという確固とした考えを抱いていたのである。

## 注

- 1 1841年の序文も含め *BR* からの引用は、引用文献に挙げる 2003年のペンギン版からである。和訳は小池滋訳を参考にした。
- 2 アンガス・ウィルソンは、ディケンズの生涯を6つの段階に分けた際の第4段階が *BR* から始まったと見なしている (Angus Wilson 145)。
- 3 アックロイドはゴードン暴動に関する箇所では、*BR* から複数回引用して資料として用い、その理由として、ディケンズがロンドンの雰囲気や気風を理解していることを指摘している。それに賛成するとしても、ディケンズの *BR* 執筆の引き金として、暴力と群集への関心以外何も挙げていないのは、言葉不足だと考えられる (Ackroyd 484–86)。
- 4 “constitutional” という形容詞はデニスが自分の職業について複数回用いる他に、タパーティットがテンブル・バーの門について述べる際 (77)、そして、語り手がウィレット氏の気性を表現する際に使用している (446, 687)。いずれの場合もこの形容詞は肯定的な意味合いを持たず、ディケンズの社会的権威への反発が感じられる。なお、小池訳の注によれば、タパーティットがテンブル・バーの門を “constitutional” と呼ぶのは、この門にジェイムズ一世、チャールズ一世、チャールズ二世といった、ブルジョワ新興階級から敵視された王の像が飾られていたためである。ブルジョワ階級を敵と見なす「徒弟騎士団」にとって、これらの王は味方と言える。
- 5 アンガス・ウィルソンによれば、ゴードン暴動の背景として、カトリック教徒であるアイルランド移民に対するロンドンの失業者たちの反発を、現代の歴史家たちは挙げている。おそらくディケンズはこのことを知らなかった (Angus Wilson 152)。
- 6 *OED* と *Britannica* によれば、ポグロム (pogrom) は元来、組織的な大虐殺で、あらゆる団体や階層の破壊または撲滅を意味するロシア語である。しかし、1881年から1917年にかけて、キシニョフ (Kishinov) などでユダヤ人に対して行われた虐殺行為を指すのに諸外国で用いられたことから、国際的な語となった (*Britannica*)。英語では、1882年の『タイムズ』(*The Times*) が、ユダヤ人虐殺の阻止を訴えて最初に用いている (*OED*)。

## 引用文献

- Ackroyd, Peter. *London: The Biography*. 2000; London: Vintage, 2001.
- Bowen, John. “Introduction.” *Barnaby Rudge*. Harmondsworth: Penguin, 2003. xiii–xiv.
- . “The Historical Novel.” *A Companion to the Victorian Novel*. 2002; Oxford: Blackwell, 2005. 244–59.
- Butt, John, and Kathleen Tillotson, “*Barnaby Rudge*: The First Projected Novel.” *Dickens at Work*. London: Methuen, 1975. 76–89.
- Dickens, Charles. *Barnaby Rudge*. Harmondsworth: Penguin, 2003.
- . *Oliver Twist*. Harmondsworth: Penguin, 1985.

- . *The Old Curiosity Shop*. 1972; Harmondsworth: Penguin, 1985.
- Fleishman, Avrom. *The English Historical Novel: Walter Scott to Virginia Woolf*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1971.
- Glavin, John. "Politics and *Barnaby Rudge*: Surrogation, Restoration, and Revival." *Dickens Studies Annual* 30 (2001): 95–112.
- Lukács, Georg. *The Historical Novel*. Trans. Hannah Mitchell and Stanley Mitchell. 1937; London: Merlin, 1989.
- Macaulay, Thomas Babington. *History of England from the Accession of James the Second*. Vol.1. McLean, VA: IndyPublish.com, 2002.
- Marcus, Steven. "Sons and Fathers." *Dickens: From Pickwick to Dombey*. 1965; New York: Norton, 1985. 169–212.
- Spence, Gordon. "Introduction." *Barnaby Rudge*. 1973; Harmondsworth: Penguin, 1986. 11–31.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. London: Secker, 1970.
- Wilson, Edmund. "Dickens: The Two Scrooges." *The Wound and the Bow*. 1929; New York: Oxford UP, 1959.
- ゲイ, ピーター. 『小説から歴史へ—ディケンズ, フロベール, トーマス・マン』金子幸男 訳. 岩波書店, 2004.
- ディケンズ, チャールズ. 『バーナビー・ラッジ』小池滋訳. 集英社, 1975.
- バフチン, ミハイール. 『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』川端香男里訳. せりか書房, 1990.
- 原英一. 「ディケンズ・カーニヴァル—『バーナビー・ラッジ』再考」『英語青年』第129巻第10号(1984年1月), 470–74.
- ロッジ, デイヴィッド. 『バフチン以後—〈ポリフォニー〉としての小説』伊藤誓訳. 法政大学出版局, 1992.